



「畑で婚活」も農業なのだ

元TVマンがひらく農の新世界(1)

2015年1月30日(金) 吉田 忠則

農業とひととの関わりを、プロの農家に限らず、幅広く考えてみたい。日本の農地と農村を守る手がかりをつかむには、「農地は農家のもの」という古い農政の発想を乗り越える必要があると思うからだ。今回はそのウイングを思い切って広げてみたい。

1月25日の日曜日。ぽかぽかとした日差しのもと、約40人の男女が東京都国立市のJR谷保駅に集まった。向かう先は、駅から歩いて数分のところにある農園「くにたち はたけんぼ」だ。

「はい、みんな注目してください」。農園の広場に着くと、スタッフの女性が参加者に声をかけた。「それではいきます。本日の出会いにかんぱ〜い」「かんぱ〜い」。ジュースの入った紙コップや缶ビールで乾杯すると、参加者たちがいっせいに拍手をした。

この催しは、結婚情報サービスのIBJが開いた婚活イベントだ。「今日はお餅つきとたこ揚げです。大人になってからはやる機会が少ないと思いますので、みなさん是非積極的に参加してください」。



畑のなかの婚活イベント(国立市、写真はIBJ提供)

東京・国立の牧場で楽しむ「プチ非日常」

料理の準備が始まった。「みりん入れて」という声にうながされ、ひとりの女性がボトルのふたを開け、そのまま鍋に注ぎ込んだ。その豪快な入れ方にみんな大喜びだ。つぎに男性が、しょうゆをお玉で受けてから鍋に注ぐと、さっきの女性が「そうやるんだ」とちょっとはにかんだ。また大爆笑になった。



農業の新しい可能性をさぐる小野淳さん(国立市)

「プチ非日常って言うんですかね。こういう場所に来ると、のどかな気持ちになる。だから、パーティーに価値が出る」

そう話すのは、「はたけんぼ」を運営する「くにたち市民協働型農園の会」で事務局をつとめる小野淳だ。9年前に、テレビ番組の制作会社から農業の世界へと身を投じた。

プチ非日常——。そう言われてみまわすと、参加者たちが料理に興じている広場の横には馬小屋があり、その向こうには「はたけんぼ」が企業や団体に貸している畑がある。さらにそのまわりを、小野が運営している市民農園やふつうの農家の畑が囲んでいる。

「こういう場所だと、細かいことにぶつかさ言う気にならないのもメリット。例えば、『こんな鉄板でバーベキューやるの?』って文句を言うのではなく、『アウトドアだからね』ってゆるやかな気持ちになれる」

たしかに、参加者たちがまきで火をおこしているコンロは、ドラム缶を縦に半分に割ってつくったワイルドなものだ。だが、その手づくり感こそがイベントを盛り上げる。きれいなレストランで開いたイベントなら、壁の汚れひとつで興をそがれるかもしれない。

小野がIBJの婚活イベントを請け負うようになってもう3年になる。最初の年は年に2回だったが、翌年は10回に増え、最近は何と月に2回のペースで開いてきた。出会いを求める男女にとって、この空間がいかに魅力的かを物語っている。

この農園で開かれるイベントは、婚活だけではない。1週間前の1月18日には、農園に「新しいメンバー」が加わったことを記念する集まりが開かれた。オーストラリアから来たポニーのジャックとダンディだ。



「はたけんぼ」の仲間に加わったダンディ(国立市)

ようこそ、ジャック&ダンディ

2頭は2004年に日野市のNPOがとりよせたポニーで、以前は市内の駒形公園の一角を借りて飼育していた。小学校や幼稚園で引っ張りだこで、日野市内では知らないひとがほとんどいないほどの人気者だったという。

ところが、「いち市民団体が公園を使い続けるのはよくない」という市の方針で、新たに2頭の引っ越し先をみつけなければならなくなった。そのとき、「行き場所がないなら、こっちにおいでよ」と声をかけてくれたのが、「はたけんぼ」の事務局の菅井まゆみだった。

問題は小屋を建てるための費用だったが、それも人気者のジャックとダンディだけに心配はなかった。寄付をつのったところ、100人弱が約160万円を出してくれたのだ。この日のイベントは、馬小屋の完成を祝うために出資者たちを集めて開かれた。

鉄パイプとベニヤでつくった以前の小屋と違い、「くにたち馬飼舎(まかいしゃ)」はヒノキの香りが心地よい木造だ。子どもたちがポニーといっしょに過ごすロフトもある。2頭を世話し続けてきた平島素子は「公園ではできなかったことがたくさんできる」と喜ぶ。

その前日、17日の土曜日にこの場所を利用したのは、一橋大学のサークル「すなふきん」のメンバーだ。すなふきんは、留学生と地域の子どもの交流を橋渡しするサークルで、この日もドイツから来た女子学生のテ

レザとセフギが参加していた。どちらも21歳だ。



ドイツから来た留学生のセフギさん(左)とテレザさん(国立市)

「ドイツにもお寿司がありますが、日本と比べるとずっと高い。日本に来て、牛丼と味噌汁がおいしいのを知りました」と話すのはテレザ。セフギは「お好み焼きが好き。豆腐は毎日学食で食べてます」という。

外国人に日本の食を発信することは、「はたけんぼ」を拠点に幅広い活動をしている小野がとくにこだわっていることのひとつだ。しかも、たんにできあがった料理を提供するのではなく、食材を手にとり、自分で料理をすることから体験してもらう。この日は、セフギがきねを持って実際に餅をついた。

餅つきと忍者が農業を救う？

そんな小野が外国人を畑に呼び込むために、新たなプログラムとしてあためている計画がある。「『はたけんぼ』に忍者が来て、実際に手裏剣を投げる。ここをインターナショナルな畑にすることを目指したい」。テレビ番組をつくってきた経験から生まれる発想というべきか。土や作物と向き合うばかりのふつうの農家ではなかなか思いつかないだろう。

婚活イベントに、ポニーの小屋に、留学生の餅つき大会。そして、ついに忍者の登場だ。では、それが日本の農業や農村とどう関わってくるのだろうか。

「ぼくのやっていることは農業ではないというひともいます」と小野は言う。イベントだけに注目すれば、そういう感想も出るだろう。ふつう「まじめな農家」で連想するのは、「ぼくとつ」や「地道」という言葉だろうか。小野のやっていることは、そういうイメージともずいぶん違う。

「でも、自分では農業をやっていると思っているんです」

テレビの世界に生きてきた小野は、なぜ農業の世界に入ったのか。そして、小野の考える「農業」とはどんなもので、その先にどんな未来がみえてくるのだろうか。補助金づけで農業を守ろうとする農政を突破する可能性を秘めた小野のチャレンジの意味を、次回あらためてお伝えしたいと思う。(文中敬称略)

新刊！ 新たな農の生きる道とは

『コメをやめる勇気』



『コメをやめる勇気』

兼業農家の急減、止まらない高齢化――。再生のために減反廃止、農協改革などの農政転換が図られているが、コメを前提としていては問題解決は不可能だ。新たな農業の生きる道を、日経ビジネスオンライン『ニッポン農業生き残りのヒント』著者が正面から問う。

日本経済新聞出版社刊 2015年1月16日発売

[このコラムについて](#)

ニッポン農業生き残りのヒント

TPP(環太平洋経済連携協定)交渉への参加が決まり、日本の農業の将来をめぐる論議がにわかに騒がしくなってきた。高齢化と放棄地の増大でバケツの底が抜けるような崩壊の危機に直面する一方、次代を担う新しい経営者が登場し、企業も参入の機会をうかがっている。農業はこのまま衰退してしまうのか。それとも再生できるのか。リスクとチャンスをとともに抱える現場を取材し、生き残りのヒントをさぐる。

日経BP社

日経ビジネスオンライン会員登録・メール配信 — このサイトについて — サイトマップ — お問い合わせ — 利用規約

日経BP社会社案内 — 個人情報について — アクセス履歴の利用について — 著作権について — 広告ガイド — ID統合について

日経ビジネスオンライン SPECIALは、日経BP社経営情報広告部が企画・編集しているコンテンツです。

Copyright © 2006-2015 Nikkei Business Publications, Inc. All Rights Reserved.